

先報

66・7・15
27号
1部 20円
25号分 400円(干共)
先報社
東京本社 東京都千代田区
神田駿河台3の2
東京ビル内(25) 7213
大阪支社 大阪市福島区
洲上3の3 土庫ビル内
(458) 0235
京都支社 京都市左京区下
鴨宮崎町128の29
振替 東京64937
編集発行人 正木 真一

資本に屈服する労働運動

総評大会によせて

分断に抗し戦線の統一を

闘う青年部の確立をテコに

今次春闘、とりわけ、四・二六
ストは、大衆の絶大な闘うエネルギーを明らかにした。
しかし、今次春闘は、同時に、幹部の二層の右傾化、救いがたいドラク・フイの進行を明らかにした。

現在、各産業とも大会ストに入り、各々、今後一年間の路線設定を行なっているが、総じて、右傾化が著しきと打ち出されて分断しながらも、「ドレイ協定」を優遇して大会承認させた。

全通大会においても、右傾化、屈服路線がガツリ敷かれを機関を完全に牛耳っている主要派は思いのまま、大会を運営し、「組織案」(官僚体制強化)「財政一元化案」(中央一手掌握、差別賃金承認、それに、共産党の徹底的縮小)と同盟への接近等を強引におし進めた。

中立労連議長
竹花の辞任
総評の右傾化、IMF・JICの展開、同盟の存在—まことに、他方、総評と毎年、春闘共闘を組んできた中立労連でも大異変が

公労協民同の
転回について
以上、我々は、資本の対組合攻

ハノイ、ハイフォン爆撃を許すな
米の侵略、佐藤の
加担に大反撃を
闘争放棄の既成指導部を
のりこえ、直ちに闘え

JICは、今や鉄鋼、自動車、造船
電機等、総評率下組合たるをわ
ず大企業率組をほぼ全面網羅して
おりその組織性格も、上部団体の
如何を問わぬ単なる金属労組の
連絡会から、総評と対立しそれを
拒否する一大勢力に成長した。

おこっている。
中立労連の主力である電機労連
の大会で、現執行部の竹花一派が
敗れた。新執行部の清田一派は、
資本の援護のもと、竹花が執行部
に総評との絶縁(春闘での共闘と
りやめ)をせよとそれをうち倒し
たのである。もともと、竹花一派
といふは親米派の筆頭であり、ケ
ネディの親書と写真が事務所に飾
られてあることで話題を呼んだの
であるが、電機資本は、この竹花
一派を不可と、新たに清田一
派を推したのである。

かえるに、むしろ、危機的状況を
深化させているのだ。
一体、日本労働運動は、どこへ
行くのか、流れに抗して我々は何
をすべきか、—そのために、
まず、現下の資本攻撃の性格が明
らかにされねばならない。

しかし足りない。だが、個別企業内
闘争といえども、その同時的展開
は、相乗作用をつよめ、その上、
公労協等全国的統一性をもった組
合が中軸になることによって全体
に統一性を与えてきた。しかも、
六四年の四・一七スト、今年の
四・二六ストにみられたように、
日本資本主義の脆弱性は、春闘を
政治問題化させ、政府危機を伴作
りだしかねないものである。かくし
て、フルジョアは、春闘の個
別分断に積極的に行ってきたわけ
である。

第二次共産主義者同盟建設のために

帝国主義と組合主義の危機

生活防衛闘争の意義と限界

マルクス主義戦線派批判

さて、われわれは、上記の論
点とかなりの関連性をもつもの
であるが、黎明派の諸君のいう
「生活防衛=過渡的戦術スロー
ガン」論について同誌の批判を
提起した。

だし、その中に生活防衛闘争を
のみでむくむいはば、生活防衛
が企業防衛かではなく、生活
防衛のための企業防衛を主
張する一のである。換言すれ
ば、大衆を徹底的に収奪しつ
つに発生する即自的脱走を自
らの危機克服—侵略と膨脹
—のバネに利用する。

革命的激動期は、①妥協体制崩
壊期②帝国主義戦争下もよそ
の戦後、という二つに類型化さ
れているが、われわれは生活防
衛スローガンの意義は、①(1)
における場合と②(2)における場
合とは、同質でないとする。

われわれは、これらのことは
日本の階級闘争史をふりかえれ
ば、瞭然であると考ええる。
黎明派の諸君は、いともスト
レートに資本は生活防衛
機にたとえられる。だから、生
活防衛スローガンは、資本の否
定でなく、「どのような戦術
をどうするか」(P四四)という
ことと危機をむかえるわれわれ
にとって要求されることなので
ある。われわれは、黎明派の諸
君が、かかる主体の強化、配置
の問題を積極的の追求する方向
をとりつつあることを大いに敬
迎する。なぜなら、危機は、そ
れを止揚する主体に媒介されず
しては、革命的激動に転化しな
いからである。

在、我々に大切なことは、我々
の主体的条件をまよえて具体的
にどのような戦術を組織する
かであり、更にもっと大切な
ことは、その統一戦線の政策的
結果点—個々の改良闘争を結
節させる、いわば、戦略的環
節を明らかにすることである。
(このことにかんじて、我
々は第二回大会案に基本的提
起を行なっている。批判を乞
う。)

